



TITLE:

ヒルファードィングの帝国主義論 (一)

AUTHOR(S):

静田, 均

CITATION:

静田, 均. ヒルファードィングの帝国主義論(一). 経済論叢 1956, 78(4): 295-311

ISSUE DATE:

1956-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132498>

RIGHT:

經濟論叢

第七十八卷 第四號

ヒルファ—ディングの帝國主義論(一)…………… 静 田 均 (1)

イギリス海運業形成過程の基本的特質…………… 山 田 浩 之 (18)

ソヴェト國民經濟バランス論の史的考察…………… 鎌 田 武 治 (36)

社会政策・社会事業(書評)…………… 與 田 桓 (55)

[昭和三十一年十月]

京 都 大 學 經 濟 學 會

ヒルファードディングの帝国主義論（一）

静 田 均

一

帝国主義に関する理論史のなかで、ヒルファードディングが卓絶した地位をしめることについては、つとに定評のあるところであって、いまさら贅言を必要としないであらう。蛇足ながらただ一言を加えるならば、とりわけアカデミックな研究者たちによって高く評価されてきた、ということを指摘しておきたい。立場は根本的に異なるにも拘らず、ウインスローは『金融資本論』を『これまでに書かれた帝国主義に関する著作のうち最も独創的な、かつ信頼するに足るものの一つである』と賞揚し、そのヨーロッパ大陸における影響は、ホブソンの『帝国主義論』が英米の読者に与えた影響に匹敵する、と述べている（E. M. Winstow, *The Pattern of Imperialism*, 1948 p. 163）。またロビンスは『レーニンに対して主たる理論的影響を与えたものは、疑いもなくヒルファードディングの「金融資本論」である』と書き、かつ『本書においては過少消費説が決定的に斥けられている』という点に注意を喚起している（L. Robbins, *The Economic Causes of War*, 1939 p. 34）。いずれにせよ、彼等はレーニンよりも、むしろヒルファードディングにより多くの独創性を認めるものの如くであり、そのかぎりではまさしく揆を一にするといい。もつともわ

が国においては、レーニンをもつてあらゆる帝國主義論の最高峰を代表すると見るむきが多いようだから、ヒルファードイングに対する評価は、あながち高いとはいえないかもしれない。だが、先驅者として演じたヒルファードイングの歴史的役割の大きさを軽視することはとうてい許されない。少くとも、公正な学説史家の態度とはいいたいてあらう。わたしは本稿において、わたしなりの仕方ではヒルファードイングの理論の基本構造を明かにし、あわせて若干の考察を加えようとおもう。

二

さてヒルファードイングの帝國主義論を考察しようとするならば、われわれは何よりもさきに彼の主著『金融資本論』を顧みなければならない。『金融資本の経済政策のために』と題する同書の第五篇は五章よりなりたっているが、あたかも帝國主義を中心のテーマとするかのように見える。

では、帝國主義とは何か。ヒルファードイングは帝國主義のもとに何を理解しているのであらうか。あらためて問題をこのような形で切り出されると、実のところ軽い当惑を感じないわけにはいかない。というのは、『金融資本論』のどこを探しても、帝國主義に関する明確な概念規定が与えられていないからだ。われわれは同書の最後を飾る第二十五章『プロレタリアートと帝國主義』の中にわずかにつぎのような一節を見出すだけである。『資本は帝國主義的政策より以外のいかなる政策をもたえないが、プロレタリアートが、この帝國主義的政策に対抗するに、自由主義時代のすでに克服された国家敵視の政策をもつてすることは、プロレタリアートの任務ではない。金融資本の経済政策——帝國主義——に対するプロレタリアートの答は、自由貿易ではありえない。それはただ社会

主義たりうるのみ。自由競争の復活という反動化した理想ではなくて、資本主義の克服による競争の完全なる止揚のみが、いまやもっぱらプロレタリア政策の目標たりうる』（傍点は引用者の附したるもの）。おそらくこの一節を典拠として、ひとは帝国主義に関するヒルファードイングの概念規定をうんぬんするに至ったのであらう。いわく、帝国主義とは金融資本の経済政策であるというのが、ヒルファードイングの定義だと。

一見したところ、これだけで概念規定というには、いささか物足らぬようにおもわれるが、それにも拘らず、けっして失当であるとはいえない。なぜなら、ヒルファードイングは後続の諸論文の中でも繰り返し同様な表現を与えているからである。念のため若干の引用を付加しよう。彼は『歴史的必然性と必然的政策』（“Historische Notwendigkeit und notwendige Politik” in “Kampf,” Bd. 8, 1915 S. 212）と題する論文の中で『実際のところ帝国主義は金融資本の政策である』と云っているし、また『資本主義的發展における自律性』（“Eigengesetzlichkeit in der kapitalistischen Entwicklung” in “Kapital und Kapitalismus” herausgegeben von Harris, Bd. I 1931 S. 34）と題する論文の白文『金融資本の経済政策、したがって金融資本のかかる膨脹政策は帝国主義である』と書いている。してみれば、彼がつねに帝国主義と金融資本の経済政策を等置していたことは、きわめて明瞭であるといつてよい。

もっとも、後の論文『自律性』の中には、『帝国主義の経済政策は金融資本の経済政策にはかならぬ』、という一句も見出される（Ibid. S. 34）。この場合は、帝国主義の経済政策と金融資本の経済政策とを等置しているのだから、したがって帝国主義と金融資本が等置されている、と解することができ、しかも金融資本は彼によれば、『組織化された資本主義の支配的な資本形態』（Ibid. S. 26）なのだから、ひっきようするに帝国主義と『金融資本主義』もしくは『組織化された資本主義』とは等置されている、と解することもできであらう。そうすると、帝国主義はヒ

ルファードイングにあつても資本主義の一定の發展段階をさす、という解釈も成立するかもしれない。とりわけさきに引用した『金融資本論』の最後の章の一節で、彼が帝國主義に對するプロレタリアートの新しいスローガンとして社会主義を對置していることをおもつと、帝國主義を特定の經濟体制として把えているという解釈をますます根拠づけるようにも考えられる。

しかし、この後の解釈は思ひすぎにすぎないであらう。私見によれば、ヒルファードイングは帝國主義という表現よりも、『帝國主義的政策』(Imperialistische Politik)という表現を好んで用いるようであり、彼が國際政治や國際經濟政策に力点を置いてゐることは、疑いをいれぬようにおもわれる。のみならず、これまで多くの人々がほとんど申合せたように金融資本の經濟政策としての帝國主義をもつてヒルファードイングの見解とすることに一致しているのであるから、しいて異説を唱ふるには及ばないであらう。

ともあれヒルファードイングは、『金融資本論』の中でも、また論文『資本主義經濟の自律性』の中でも、保護關稅と資本輸出の二つを金融資本の經濟政策の代表的なものとして取扱つてゐることは、たしかである。そればかりではない。論文『歴史的必然性と必然的政策』の中で、ヒルファードイングはさきに引用した一句に引きつづいてこう書いてゐる。『内部においては、それ「帝國主義」はますます大きな規模における生産をカルテルおよびトラストに組織しようと努める。それはこの組織の利益において、その独裁にかかる保護關稅制度によつて國內市場を確保し、かくして國家對立を極度に尖鋭化する。外部に對しては、その目標はなかならず資本輸出である。後者は未發達の諸地域の政治的支配を必然たらしめる。金融資本はこれのために彼の支配する國家權力を利用する。植民地の力づくによる略取はまさしく必然である。けだし、開發が急激であればあるほど、輸出される資本量の太

きさはますます有力となり、国内資本の回転はますます迅速となるからだ。後進地域が先進諸国の支配または利益範囲に包摂されるという現象が、もまなく相ついで起るばかりではない。資本主義諸国の間における植民地の新分割をめぐる戦争が勃発するかぎり、右の事態が終りを告げるわけではない』と (Ibid. p. 212 — 傍点は引用者)。すなわちここでもヒルファードイニングが、保護関税と資本輸出を帝国主義の二つの面として把握していることは、きわめて明瞭である。

以上、数多くの引用よりして、ヒルファードイニングが帝国主義を金融資本の経済政策として理解していたという断定をくだしたとしても、もはや軽卒に失することはないであらう。それゆえわたしは、ヒルファードイニングの帝国主義論を考察するにあたって、まず保護関税と資本輸出に関する彼の見解を採りあげようとおもう。

三

『金融資本論』を通読して、われわれの注意をひくのは、ヒルファードイニングがイギリスをもつて産業資本が主導権を握っていた自由主義の時代を代表せしめると同時に、ドイツをもつて金融資本が主導権を握るに至ったより高度の発展段階にある『資本主義的独占の時代』、『金融資本主義』(『金融資本論』) または『組織化された資本主義』(『資本主義的發展における自律性』) を代表せしめ、彼此対照することによって、それぞれの相違と特徴とを明かにしている、ということである。これはすでに金融資本すなわち大銀行と資本主義的独占の結びつきを論じた箇所において見られるところであるが、貿易政策および資本輸出を論じた箇所においても、一貫して踏襲されている固有の観点である。アメリカおよびフランスもときおり引合いに出されているが、むしろ付随的な傍証としての役割を

与えられているにすぎない。

さて金融資本の經濟政策として、ヒルファードイングが第一にとりあげているのは關稅である。關稅問題こそは、一九世紀の末葉から二〇世紀にかけて、ドイツの經濟と政治とが當面した最もセンセーショナルな問題であつた。中心は周知のとおり鉄鋼關稅と穀物關稅であるが、それは學界ならびに實際界に活潑な論争をまきおこした。ヒルファードイングの所論のごときも、こうした時代を背景とし、社會主義者の立場から、ひろく金融資本の支配下における貿易政策の歸趣に照明を与えようとするものにはかならない。

ヒルファードイングによれば、關稅に対する工業者階級の態度は、イギリスとドイツを比較すると、全く異つた方向をたどつたといふことができる。十九世紀におけるイギリスの自由貿易政策なるものは、同國が資本主義的發展の先驅であり、従つてイギリスの工業が技術的にも經濟的にも他國を凌駕してゐたことに起因するが、なおそのほかにいろいろな要因が作用してゐた。その一つは自然的条件である。島帝國イギリスが海上輸送の点で地理的に恵まれていたばかりでなく、鉍石と石炭の産地が同じであつたことは、運賃の節約に役立つところ大であつた。特に近代的な交通機關が未発達な時代においては、この運賃の節約といふことは、決定的な意義をもつてゐた。他方、資本主義の發展には資本の蓄積を必要とするが、イギリスはスペイン、オランダおよびフランスとの爭鬭戰において制海權を掌握し、従つてまた広大な植民地を支配したことが、資本蓄積を可能ならしめる有力な契機となつた。さらに資本主義の發展は、近代的労働者の存在によつて条件づけられるが、土地貴族によつて農村を追いだされた農民層の没落が、工場労働者たるべきプロレタリア階級を創出した。国内における大工業の勃興、人口の増加、とくにその都市への集中は、農業の衰微をもたらし、食糧の自給力を減退せしめると同時に、不作のときは穀物を海

外から輸入する必要に迫られる破目に陥れた。そうすると、穀物の価格に運賃と関税が加算されるのは、当然である。しかも交通革命の勃発以前の当時における運賃は、すこぶる高かった。かくして大地主階級は穀物関税の熱心な支持者であり、これを利用して周期的な穀物価格の騰貴を策し、もって地代の騰貴をはかった。だが穀物価格の騰貴は、当然に生計費の騰貴をもたらし、その結果、労賃の騰貴を促したばかりでなく、穀物の輸入にもとづく国収支の悪化は、貨幣制度の狭隘な基礎に達着して、つねに貨幣恐慌を随伴する危険を招来した。こうした一連の關係は、いまや新興の工業者階級の利益と氷炭あいれぬものとなったことは、当然である。けだし穀物の価格騰貴は、労賃の騰貴を結果するが、労賃の騰貴はとりもおさず工業資本家の可変資本の増大をもたらし、また製品を生産費の増加をもたらしこととなり、販路の梗塞に遭遇することは、不可避だからだ。かくして穀物条令の撤廃をめぐる地主と産業ブルジョアジーとの闘争は、ついに後者の凱歌によって終末をつけることとなり、自由貿易はイギリスの『古典的な経済政策』となったのである。

以上イギリスにおける自由貿易の歴史を回想したのち、ヒルファーディングは後進国ドイツにおける国情の相違に言及する。それによると、ドイツでは地主は農産物を輸出する立場にあつたところから、最初のうち彼等は自由貿易を謳歌していた。自由貿易こそは、農産物の販路を拡大し、かつ工業製品の輸入を容易にしたからである。工業資本家は先進国イギリスの優勢な競争に圧倒されて、著しく発展を阻まれていた。彼等はまずもって熟練労働者や工場経営者や技師などの欠乏から生ずるあらゆる障害を克服し、技術上の立遅れをうめあわせ、商業組織を整備し、信用の發展をはかり、手工業者のプロレタリア化と農民経済の解体を速めることによって、イギリスに追いつくように馬力をかけねばならなかった。のみならず、間接税がまだ初期の段階に属し、かつ農村の現物経済が广大

な地域にわたつて頑強に残存していたために、間接税の發展が妨げられていた當時にあっては、関税によって国庫収入の増大をはかることは、今日よりはるかに重要視されざるをえなかった。従つて工業製品に対する関税は、國民經濟に有害な作用をもたらすものではないように一般から信ぜられていた。

四

ところが金融資本が主導権を掌握する一九世紀の八〇年代のドイツにおいては、事情はこれまでに比べると、だいぶ變つてきた。かつては穀物輸出国であつたドイツも、次第に低廉な外国産の穀物の競争に脅かされるようになった。プロシヤ・フランス戦争に勝利した新興ドイツ帝國は、多額の賠償金を獲得し、これを槓杆として重工業を中心とする産業革命に邁進することとなった。

ヒルファードイングは書いている、『ドイツでは国内の関税障壁の崩壊後における、とりわけ帝國建設後における工業の急速な勃興は、貿易政策的関心を完全に移動させた。農産物輸出の停止は、地主を保護関税の味方にした。工業界からも保護関税の味方が現われ、かれら地主と手を握つた。強力なイギリスの競争に対抗して保護関税を要求した重工業、なかんずく製鉄業の代表者たちが、まさしくそれであつた。高度の有機的構成をもつこの工業部門は、生活資料の価格騰貴をしのぶことは、わけなくできた。もともと、この騰貴は當時なおさほどではなく、その作用も、アメリカ農業の競争の開始によつて帳消しにされたのである』（『金融資本論』第二十一章）。ヒルファードイングはさらに言葉をつづける。いわく、『他方では、工業が恐慌の結果ひどい打撃を蒙つていた。のみならずドイツの製鉄業は、自然的・技術的な理由から、とりわけ銑鉄の除磷法の發明以前には、イギリスの製鉄業より立ちお

かれていたため、なおさらイギリスの競争は堪えがたきものであった。加うるにきわめて高度の有機的構成をもち、わけても大きな固定資本部分をもつ工業では、はやく進んだ発展の先駆者には、容易に追いつけるものではなかった。保護関税政策の支持者には、またドイツですではやくイの一番に重工業の発展と緊密に結びついていた銀行資本の一部門もあった。保護関税政策の反対者は、輸出産業に投じられた産業資本の一部と商業資本であった。ところが一八七九年における保護関税の勝利は、保護関税の機能における転向の開始を意味するものであった。育成関税は次第にカルテル保護関税となった』（前掲書、第二十一章）と。要するに自由貿易から保護関税へ、育成関税からカルテル保護関税へというのが、資本主義の発展に伴う貿易政策の動向である、とヒルファードディングは強調するのである。

この間の消息をヒルファードディングに従つてもう少し究明しよう。そもそも保護関税論は、先進工業国の競争に堪えない後進国が、また独り立ちのできない幼稚な産業を庇護し、育成するという点に、合理的な根拠をもつものである。現にリストは、イギリスの先駆けとドイツの立ちおくれとの間のギャップをうめあわせるために必要なかぎりにおいて適度な関税を提唱したのであって、それはあくまで期限づきのものであった。すなわち関税の保護によって、国内の工業が次第に成長し、国際競争に堪えうる段階に到達するならば、関税の必要はなく、当然に撤廃されなければならない。もしそうでないとすると、関税は輸出の障害になるだけである。なぜなら、諸外国もこれに対抗して保護関税を設けることは必定であつて、いたずらに関税競争を激化させるにすぎず、世界市場の狭隘化をもたらす結果となるであらうから。

ところが金融資本主義の時代になると、事態は全く逆転する。いまや世界市場において疑いもなく競争能力を有

し、従つて旧派の理論からすれば、保護關稅によつてもはや何らの利益をも享受しない筈の、充分に成長し、輸出能力を有する工業が、高率な保護關稅の支持者として登場するといふ一見不可解な現象があらわれるのだ。そしてこの謎をとく鍵は、ヒルファードイングによれば、關稅とカルテルとの關係にほかならぬ。

工業保護關稅は、カルテルの結成を促進し、または存続を保障する効果をもっている。けだし、一つには外國の競争を遮断するからであり、二つにはカルテルをして關稅だけの差額を利せしめるからである。本来、カルテルは国内における競争を排除することによつて超過利潤を實現する可能性をもつが、いまや關稅の保護によつて別箇の超過利潤をも享受しうるようになる。かくしてカルテル化された産業は、保護關稅を恒久的な制度たらしめることに特別の関心をいだくわけであり、利潤追求の努力と同じように關稅引上げの努力もまた際限のないものとなる。歴史的に見れば、ドイツにおける農業關稅と工業關稅の成立は、巨大地主であるユンカーと重工業を代表する鉄鋼資本家との妥協と提携のもたらした政治的取引の產物にはかならないが、ヒルファードイングはこれを一般的な理論にまで高め、金融資本主義の双生児と解する点に、われわれは注意を払わねばならぬ。

工業關稅は独占を強化し、当該商品の国内價格を世界市場プラス關稅の線に近づけることによつて、莫大な超過利潤の成立を可能ならしめるとはいえ、他の反面において当該商品の購買者たる関連産業にさしあたり過重負担をおわせることとなり、結局においては最後の消費者にまで犠牲を忍ばしめるという帰結を生むであらう。ともあれ関連産業者が製品を国外に輸出する場合、國際市場における彼等の地位を不利に陥れることは明かである。しかし關稅の保護をうける工業の独占体は、国内市場よりあげた超過利潤の一部をさいて、自己の製品を國際價格で輸出することができると同じ筆法で、超過利潤の一部を輸出奨励金として加工工業に交付することにより、彼等の製品の

輸出を促進することもできる。『奨励金制度の發達とともに、保護関税はその機能を全く変えた。実にその反対物に転倒したのである。外国の産業による国内市場の征服に対する防衛手段だったものが国内産業による外国市場の征服の手段となり、弱者の防禦武器だったものが、強者の攻撃武器となったのである』（前掲書、第二十一章）。

五

金融資本の經濟政策として、第二にヒルファーディングの重要視するのは、資本輸出すなわち海外投資である。関税が独占の強化という点で対内的な問題であるに反し、資本輸出は膨脹政策や植民政策を伴うかぎりにおいて、対外的な問題であり、それだけ帝國主義の断面を露骨にさらけだすところに興味がもたれる。しかもオットー・バウアーによると、貿易政策に関する部分は、すでに『金融資本論』の公刊にさきだつて、カウツキーやバルブスやバウアーや、あるいはヒルファーディング自身さえも論じたところであつて、必ずしも目新しい感じを与えないが、資本輸出を論じた部分は、『金融資本論』の中でもとりわけ創見にとんだ部分であるという（O. Kauer, *Das Finanzkapital*, „Der Kampf“ Bd. 8. 1910 S. 367）。では、それはどのような論旨からなりたつていたのであろうか。

ヒルファーディングによれば、資本輸出とは、『外国で剰余価値を生むべき使命を有する価値の輸出』を意味するが、そのさい重要なことは、その剰余価値が国内資本の支配下にあるということである。換言すれば、国外で現実に機能する資本が国内資本の支配下であり、従つて前者の生産した剰余価値の一部または全部が後者に帰属する場合をさす。資本輸出はそれだけ国内の価値量を減ずるけれども、外国で生産された剰余価値が流入するかぎりでは、国民所得を増すわけである。資本輸出は二つの形態において行われる、——利子を生む資本としてか、または

利潤を生む資本として。前者は貸付資本、貨幣資本であり、後者は産業資本にはかならない。

一般に資本輸出は、資本輸出国における利潤率および利子率と資本輸入国における利潤率および利子率との間に隔差のあることを前提とするものである。ところでヒルファードイングによれば、利潤率の高さは資本の有機的構成に依存するがゆえに、それは資本主義の發展の程度に依存するといふことができる。資本主義の發展が高ければ高いほど、一般的利潤率はますます低く、逆に資本主義の發展が低ければ低いだけ、一般的利潤率はますます高いのが原則である。しかもこうした一般的規定のほか、なお特殊的规定が付け加わる。すなわち資本主義の未發達な、従つて信用および銀行の組織が欠けている国々では、資本主義の發展した国々にくらべて、利子率ははるかに高い。そしてこの種の高い利子率は貸付資本の輸出を促す刺激として作用する。つぎに資本主義の未發達な後進諸国においては、企業利潤が比較的に大きい。低廉な勞賃と低廉な地代によつて直接の生産費が少いばかりでなく、特權や獨占によつて利潤の釣りあげも行われるからである。資本主義的に生産された商品が手工業によつて生産された商品と競争するかぎりでは、特別利潤が實現されるといふこともありうる。

以上、ヒルファードイングの指摘する事實は、何人も首肯するところであるに違いない。しかし資本輸出は、近代の資本主義的獨占が大きな役割を演ずる以前においても、ある程度見られた現象であつて、獨占資本主義に特有の新しい現象ではない。現にオランダは一八世紀において活潑な資本輸出を行った歴史をもっているし、一九世紀にはいつてからは、イギリスがめざましい活躍ぶりを示した。それは七〇年代までに相當の額に達していたし、第一次大戰の勃發にいたるまでつねに先頭にたち、他の諸國をひきはなしていた。第二位をしめたのはフランスであり、ドイツはようやく第三位を保つていたにすぎない。

ところでイギリスにしろ、フランスにしろ、当時の代表的な資本輸出国はいずれも、独占の形成という点では、ドイツやアメリカにくらべてはるかに立ちおくれていた。これは周知の事実といつてよいが、ヒルファードディングもまた充分にこのことを念頭においていたことは、明かである。彼はいう、『イギリスはその世界市場独占の時代から世界市場の需要に應じて準備された資本の充分な産業を有しており、この産業はドイツやアメリカにくらべると、比較的徐々に発達したのであって、その膨脹力もより小であるが、しかしその蓄積資本は非常に大であつて、海外投資からは蓄積されるべき新しい利潤量が絶えず国内に流入した。蓄積されるべき資本量が国内で投資可能の資本に対してしめる割合は、この国において最も大であり、従つて海外投資の衝動はこの国において最も強烈であるが、しかも要求される利子率は最も低い。フランスにおいても、また、一方で海外投資から不断の流入の存するほか、古くから蓄積された富は、所有関係から見てもほとんど集中的ではないにせよ、やはり発達した銀行制度によつて大いに集積されているし、他方、国内における産業の發展が静止状態にあるところから、資本輸出の衝動は強烈である』(前掲書、第二十二章)。

右の引用が示すところでは、資本輸出の推進力は、先進国における相対的に過剰な資本の集積ということになるようである。しかしこれだけでは説明はけつして充分であるとはいえない。なぜなら、ヒルファードディングに就つての問題は、むしろ産業独占および銀行独占の最も進んだ一九世紀の八〇年代以降における新興の資本主義諸国すなわちドイツおよびアメリカの資本輸出の必然性に関する説明にあるはずだからである。

ヒルファードディングは言っている。『資本輸出はイギリスの独占するところであつて、それは同時にこの国のために世界市場の支配を確保した。……しかしイギリスの独占が破れ、そして自由貿易の結果、充分有効に組織され

ていなかったイギリスの資本主義に対抗して、アメリカおよびドイツの資本主義が優勢な競争者として成長するにいたるや否や、事情は一変した。金融資本への發展は、これらの國々において資本輸出への強烈な衝動を生み出した』(前掲書、第二十二章)。なぜであるか。そして事態はどのように一変したのであらうか。

六

『カルテル化は異常な特別利潤を意味し』とヒルファードイングは書いている。『この特別利潤は資本化され、そして集中せる資本量として銀行に流入する。しかるにカルテルは同時に投資の緩慢化を意味する。けだしカルテル化する産業においては、カルテル第一の方策が生産の制限にあるからであり、カルテル化しない産業においては、利潤率の低下が進んで投資することをまず躊躇させるからである。そこで一方では、蓄積さるべく運命づけられた資本の量が急激に増加し、他方ではその投資の可能が減少する。この矛盾は解決を要求し、資本の輸出においてこれが解決を発見する。資本の輸出そのものは、カルテル化の結果ではない。が、それは資本主義的發展と分つべからざる現象である。しかしカルテル化は、この矛盾を急激に増大し、資本の輸出をして急性的なものたらしめる』(前掲書、第十五章)。

すなわちカルテルは超過利潤の実現によって大量の貯蓄を形成するに拘らず、国内においてこれを投資するだけの誘因を見出すことができないというジレンマに達着し、国外に新しい投資先を求めようとする衝動に駆りたてられるというのが、ヒルファードイングの与えた独得の解答である。彼によると、『こんにち産業資本輸出の任にあたるものは、なканずくカルテルとトラストである』(前掲書、第二十二章)。しかし私見によれば、カルテルが加盟

諸企業の共同事業として資本輸出を行うことは、現実には稀であり、おそらく加盟企業のうち特に有力な企業、すなわちトラストまたは准トラストが資本輸出の担い手となるであろう。が、ともかくもこうした独占体は重工業においても最も強大であり、激増しつつある自己の生産に対して新しい販路を獲得するために、資本輸出の衝動が最も強烈であることは、首肯できる。鉄道の敷設、鉱山の採掘、諸外国の軍備の拡張、発電所の設立などは、これら独占的な重工業のわけでも利益とするところである。しかもかかる重工業の背後には、これらの部門と最も緊密な関連をもつ大銀行が控えていることを見逃すことはできない。『株式会社と発達した信用組織とは、資本輸出を促進する』（前掲書、第二十二章）が、とりわけ産業資本の支配から金融資本の支配へと発展するとともに、大銀行の資本輸入国への融資は、資本輸出国の大事業会社に発注することを条件として与えられる。『銀行資本と産業資本との緊密な連結は、資本輸出のかような発展を急速に促進する』（前掲書、第二十二章）。

なお金融資本主義時代に資本輸出を促進する契機として、ヒルファードディングは関税の役割をも強調している。『他の一国における関税の開始または、引上げが、そこへの輸出国にとってその販売可能の制限を意味し、従ってその産業的發展の一障害を意味する……。けれども保護関税は、この国においては特別利潤を意味するものであり、そしてこの特別利潤は、商品の代りに商品生産そのものを外国へ持込む一つの動機となる』（前掲書、第二十一章）。資本主義が未発達であった間は、かような可能性は比較的少かった。というのは、資本の移動を妨げるいろいろな障害があったからである。例えば国家の保証の欠如、熟練労働者の不足、等々。しかしこれらの障害は、こんにちではたいてい除去されている。『かくて發展した国の資本にとっては、保護関税制度の作用が利潤率におよぼす有害な結果をば、資本輸出という手段によって克服することが可能となるのである』（同上）。

上來見たところによつて、『組織の最も進歩した工業国』であるドイツやアメリカが、資本輸出に対する最も強烈な衝動を有している理由は、明かとなった。資本輸出には貸付資本の形態をとる場合と産業資本の形態をとる場合と二つあり、前者は利子を、後者は利潤をそれぞれ輸出国にもたらすわけであるが、産業資本の形態をとる場合の方がますます重要性をもつ傾向にあることを、ヒルファードイングは指摘している。

ところで資本輸出は、高度資本主義相互間にも見られると同時に、先進資本主義国と後進非資本主義国との間にも見られる現象である。のみならず、それは単なる民間資本だけの問題ではなく、国家権力とも絡りみ合つて複雑な様相を呈する。これらの諸点に関して、ヒルファードイングはどのような見解をいだいていたのであろうか。

ヒルファードイングによると、ヨーロッパにおいては、国家的分裂が経済的に相反する利害關係をつくりだした。すなわちこれらの国々は、経済的に相互補充の關係にあるのではなく、むしろ同種の商品を生産するかぎりにおいて、相互競争の關係に立ち、互いに敵対する間柄となっている。しかもこうした敵対關係は、金融資本の経済政策によつて異常に昂進させられる。この対立は一九世紀に見られたように、ヨーロッパそのものの内部で統一的な経済領域をうちたてようとする努力から生ずるのではなく、中立の外国市場を自国に合体しようとする努力から生じ、この努力のためにいまやヨーロッパ諸国の國家権力が用いられるのである。『問題は』、とヒルファードイングは語を強めていう、『資本主義的にすでに高度の發展をとげた国々を自分に合体することではない。かかる国々の産業は、それみずから輸出能力を有し、従つて征服国にとっては、単に競争を一層激甚ならしめるだけのこと、どっちみち他国の過剰資本に対する投資部面としては、あまり考慮にあたらない。そこでむしろ考慮されるのは、未開發の地域であつて、その開發が最も強大な資本家群にとって大きな意義を有しうる領域、従つて主として海外

の植民地だけである。なぜなら、ここでは資本にとって大規模に資本を投下する機会が与えられているからである。特に近代運輸機関、鉄道および汽船連絡の創造は、巨大な資本量を吸収するからである』(前掲書、第二十二章)。

以上の叙述によって明かなごとく、資本輸出にとっては、未開発の地域を植民地として自国の政治的支配下におくことが、最も切実な要求となるゆえんを、われわれは知ることができる。植民地獲得慾が熱病のように列強を捉えていた前世紀の末から今世紀のはじめにわたる歴史を回想するならば、右の説明はいちおう納得のいくもののようにおもわれるであろう。ただし、第一次大戦以前におけるドイツについて見ると、資本輸出のうち植民地への投資がしめる割合は微々たるものであって、むしろ植民地以外の諸地域に対する資本輸出が大きな比重を示していた。これに反してイギリスにおいては、植民地への輸出が十九世紀の七〇年代以降ますます比重を高めるに至ったのである。